

# 山豆



# 御 挨拶

宮 司 宮 西 修 治

昨春以来猛威を振るっている新型コロナウイルス感染症。

本稿執筆時点の五月末に於て、第三回目となる緊急事態宣言が続くなか、昨年に続き本年も山王祭における各祭典は神職のみで執行し、各種神賑行事は中止と致します。

真に忸怩たる思いではありますが、氏子御崇敬の皆様には何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

大正七年の「スペイン風邪」流行の際には、日本国民の四割以上が罹患し、終息するまでに三年余の歳月を要したそうですが、古典を紐解けば大規模な感染症の流行は数多あります。

古い例では第十代崇神天皇の御代の疫病の流行と、その終息までのさまが『日本書紀』に記されています。「国内に疾疫多し。民死亡者有り。且大半矣」。国内に疫病が大流行し、その結果「百姓流離い、或は背叛有り」とあるように、国内は麻の如くに乱れてしまいます。

そこで天皇は朝夕に天神地祇を祈り、また八十万の神々をお招きした上で占いをされると、倭迹迹日百襲姫に神が懸り「若し能く我を敬い祭らば必ず当自平」、自分を敬って祭るなら必ず収まる、そして「我は倭国域内に所居る神」で「名を大物主神と為う」と告げます。

このお告げを受け、さつそく教えのままにお祈りしましたが驗なく、天皇は斎戒沐浴したうえで「私の敬が足りないのではようか、どうか夢の中でお諭してください」とお祈りをされます。すると、その夜の夢に一人の貴人が現れ、御殿に向かって立ち、自ら大物主神と名乗って「心配なさるな。我が兒、大田田根子を以て吾を祭らせばたちどころに終息する」と教えます。「誰に祭をさせるべきか」を神が指定する、ということでした。

天皇はすぐに天下に告げて、その「大田田根子」を求めて探索させたところ、「茅渟県陶邑」という所にその「大田田根子」が見つかったので、大物主神を祭る祭主とし、また「長尾市」という者を倭大国魂神を祭る祭主として、さらに八十万の神々をもお祭りしたところ「国内漸謐。五穀既成。百姓饒」。疫病は終息し、五穀は豊かに稔り、百姓は賑わったということです。

その大物主神をお祀りする神社は奈良県の大神神社であり、今でも「鎮花祭」という疫病退散の祭が行われています。また京都八坂神社「祇園祭」や大阪天満宮「天神祭」も疫病退散を祈る祭であり、遙か遠い昔から現在に至るまで、我々日本人は疫病が流行るたび、その終息を願って真摯に祭を行ってきました。

現代に於ても、この新型コロナウイルスの退散を神に祈る気持ちに変わりはありません。一日も早く、以前の平穏な世の中に戻るよう真摯に、誠実に神事を奉仕し、神が語り給う、神様が御嘉納下さるよう真剣に祈つてゆく事こそが我々神職の使命と心得、今年の山王祭諸祭を斎行して参ります。

## 令和三年 山王祭 行事日程

六月

七日(月) 十一時

末社八坂神社例祭

十日(木) 十一時

表千家家元献茶式

十一日(金) 十一時

摂社祭

十二日(土) 十時

境内茶園並狭山新茶奉納奉告祭

十三日(日) 十八時

献灯祭

十五日(火) 十一時

例祭

十六日(水) 十一時

煎茶礼道日泉流献茶式

同 十三時

山王嘉祥祭

十七日(木) 十時

裏千家家元献茶式

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、例年執り行っている祭典を神職並びに各関係者のみで行い、奉納剣道大会奉告祭・稚児行列・山王音頭と民謡大会は中止します。何卒ご理解の程、お願い申し上げます。

## 特別寄稿



参議院議員 山谷えり子

私のふるさと福井の幕末の歌人である橘曙覧の「独楽吟」。

「たのしみは」で始まり、「…とき」で終わる形式の五十二首の連作で、日常の中にある「暮らしや家族」、学びへの姿勢を詠んだ身近に感じる和歌として、教科書にも載っており皆さまも一度は目にされたことがあるのではないだろうか。

近年では、平成六年に天皇皇后両陛下（当時）がご訪米された際の歓迎スピーチにおいて、クリントン大統領（当時）が曙覧の「独楽吟」の中の一詩「たのしみは朝おきいでて 昨日まで 無かりし花の 咲ける見るとき」を『It is a pleasure when rising in the morning I go outside and find a flower that has bloomed that was not there yesterday.』と英訳し引用されました。

コロナ禍の長期化で、先がみえにくい今だからこそ、わが家では小学

生の孫と囲む食卓で、『たのしみは妻子むつまじく うちつどひ 頭ならべて 物をくふとき』と詠んで夕飯を食べたり、「たのしみは、…とき」を創作して、披露したりとさまざまな日常を楽しむよう心掛けています。

そして、曙覧の歌には『たのしみは 神の御国の 民として 神の教へを ふかくおもふとき』という一首もあります。

ご皇室をいただくことの有難さをかみしめながら、私たち日本国民は、睦み和らぎ、徳を高め、勤め励んで、平和の国、文化の国、道義の国としてこれまで歩んでまいりました。

わが国は、初代神武天皇から今上陛下百二十六代まで長きにわたり、万世一系で継承されてきた世界的にも稀有な国でもあります。

しかしながら皇族数の減少も懸念される中で、今春には安定的な皇位

継承の在り方を検討する有識者会議が発足いたしました。これまで、政府として一貫してきた「男系継承が古来例外なく維持されてきたことの重みを踏まえる」という見解から外れることのないように注視してまいります。

伝統は一度でも崩したら取返しのつかないこととなります。

昨年十一月の参議院内閣委員会で、私は宮内庁に質問し、古来、直系で危機的な状況になった際について、説明していただきました。

第二十五代武烈天皇から第二十六代継体天皇への継承は、共通の祖先である第十五代応神天皇まで約二百年遡って十親等の隔たりがあります。第百一代称光天皇と第百二代後花園天皇への継承は、共通の祖先である北朝第一代光厳天皇まで約百年遡り八親等の隔たりです。さらに、第百十八代後桃園天皇から第百十九代光格天皇への継承は、共通の祖先である第百十三代東山天皇まで約七十年遡って七親等の隔たりがあります。

特筆すべきは、第五十九代宇多天皇は、一度皇籍離脱をされた後にまた戻られて天皇になられています。

先人たちが男系でつなぐのに、これほどまでの努力、重さを踏まえながら紡いできてくださったのです。

先人たちが紡いできた歴史のありようを今に生きる私達もしっかりと受け止めなくてはなりません。

いつの時代にあっても、常に国民に寄り添いながら国の安寧を祈り続けてくださる天皇陛下のお姿は、私たちの心に深く刻みこまれ、決して忘れることはありません。

激動する世の中にあっても、私たちが希望に満ち溢れ、誇りある日本の輝かしい未来をつくりあげていく力の源となっているのです。

当面続くであろう様々な制限がある日々の生活を「変化のない日常」と捉えるか、大きな変化を迎えるための「積み重ね」と捉えるか、私達のDNAは自然とその答えを知っています。

目に見える結果ばかりを追い求めることから少し離れて、一つの事柄にも「鳥の目」、「虫の目」の視点でじっくりと深く思う時代が今なのかもしれません。



# 山王祭

—日本三大祭—

川越祭礼研究家

水戸 一齋

(監修・山瀬一男)

## 小江戸川越と江戸の関係

まず初めに、私が住んでいる埼玉県川越市を紹介します。

川越は江戸時代に「小江戸」と呼ばれるほどの繁栄を築きましたが、それよりはるか昔から江戸とは深いつながりがありました。平安時代の武蔵国は、桓武平氏である秩父氏が支配していました。秩父氏は一族を武蔵国の各所に配置し、分割統治さ



写真1 太田道灌像(川越市役所)

せました。それぞれの地を任せられた一族はその土地の名を名乗り、川越は河越氏、江戸は江戸氏が治めました。川越と江戸は親戚関係にあったのです。

室町時代に入ると、武蔵国は関東管領扇谷上杉氏の支配下となりました。上杉氏は執事の太田道灌公(写真1)に防御のための築城を命じ、道灌公は長禄元年(一四五七)に川越城と江戸城をそろって完成させました。川越城と江戸城は同い年の双子だったのです。

太田家の記録をまとめた「太田家譜」には、道灌公が川越仙波の山王社を江戸城内に勧請したと書かれています。それが山王権現、現在の日枝神社になったと伝えられています

が、日枝神社の正史である「日枝神社史 全」には、道灌公ではなく江戸氏が、河越氏の創建した川越の山王社(新日吉社)を勧請したのであろうと記されています。いずれにしても、川越から勧請されたことに違いはありません。

## 大江戸の「山王御祭礼」

寛永十二年(一六三五)、三代将軍徳川家光公は山王権現の祭礼行列を江戸城内に練り込ませ、やぐらの上から上覧しました。これが「山王御祭礼」です。神社の神輿と氏子の山車(だし)。当時は「出し」と表記しました)からなるこの行列(練り物)は、その後も将軍の上覧にあずかり、踊り屋台などのにぎやかな曳きものを加え、いつしか「天下祭」と呼ばれるようになりました(写真2)。その練り物の形態ははるか上野国、常陸国、遠江国などにまで伝播し、現代の川越まつりにもその面影を色濃くとどめています。

山王御祭礼が一つの頂点に達したのは、十九世紀に入った文化文政期です。富を蓄積した町人たちが文化の担い手となり、山王御祭礼の場でも踊り屋台を中心としたきらびやかな

な芸能を披露しました。その後、天保の改革により祭礼は一時縮小しましたが、町人たちはそれまでわき役同然だった山車を飾りつけることでそれに対抗し、元の華やかさを取り戻しました。

本来「出し」というのは、町の象徴たる人形などを依代(よりしろ)。神が依りつくもの)にして一本柱の上に載せ、肩に担いだり牛車で曳いたりするものだったのですが(これを「一本柱万度型山車」といいます)、天保の改革で踊り屋台が規制の対象となったことから、町人たちは人形の周りを豪華に装飾して存在感を際立たせ、果ては山車の一本柱を色とりどりの幕で覆い、その前面に囃子台を設けて踊り屋台に代わる町の主役に仕立てたのです。安政年間には幕内の一本柱を二層の木柱に代え、二層のうち一層を山車の上でせり上げ、さらにその木柱から人形をせり出す構造にして、江戸城の城門をくぐりやすくなりました。世に言う三層せり出しの「江戸型山車」は、このようにして生まれたのです。

## 蘭陵王の山車

江戸時代も終わりに近づいた文



写真2 立川斎国郷画「山王御祭礼之図」 写真提供：山瀬一男

久二年（一八六二）、最終進化系と呼ぶべき山車が氏子町から出されました。通油町・田所町・新大坂町の三町による「蘭陵王の山車」です（写真3）。山車の人形は能を主題に作られることが多いのですが、蘭陵王は雅楽から取り入れられ、山車を覆う幕も雅楽の世界で彩られていました。山車そのものも、三層せり出し構造に加え、囃子台の屋根を唐破風（からばふ）にするという凝った作りでした。その豪華さは一目瞭然、二代歌川広重の浮世絵や、明治二十六年（一八九三）のシカゴ万博に出品された絵画にもその雄姿が描かれています。いかに印象深い山車だったかがわかります。

驚くべきことに、この「蘭陵王の山車」は当時のままの姿で埼玉県加須市に現存しています。江戸の三町とつながりの深かった加須が明治十六年にこの山車をもらい受け、地元祭礼で曳き回していたのです。長い年月のうちに加須においてすら取得の経緯が忘れ去られていましたが、平成十五年の「江戸開府四百年記念事業」で東京駅前の丸ビルに展示されたことから、改めてその存在が知られるようになりました。この

展示は江戸祭礼研究家の山瀬一男氏の推薦により実現したものです。この山車がいかにすばらしいか、多くの人に認めてもらいたいがためです。現在この山車は加須市の有形民俗文化財ですが、一日も早く国レベルの文化財に昇格することを望みます。

### 「だし鉄」の山車

山瀬氏によりますと、「蘭陵王の山車」は神田代町の「だし鉄」という宮師によって作られた模様です。この山車と同じ文久二年に作られた神田橋本町二丁目の山車の写真が残っていて（写真4）、唐破風屋根の山車の横に「だし鉄」と書かれた弓張提灯や、「だし鉄」の棟梁山本鉄之氏の名が書かれた高張提灯が



写真3 山王御祭礼 21 番通油町ほか（現加須市本町）  
「蘭陵王の山車」 写真提供：山瀬一男

写っているからです。この写真は大正三年の「東京大正博覧会」に飾られた時のものですが、唐破風の形状は「蘭陵王の山車」と瓜二つです。そして山車の前に立つ紋付き袴を着た老人こそ、山本鉄之氏本人であると言われています。

また、群馬県渋川市に現存する山車も「百雲正神田だし鉄」の作であるとの記録が残っています。この山車は日本橋通三丁目から購入したもので、明治期に通三丁目で撮影された写真も残っています（写真5）。その唐破風屋根は明らかに「だし鉄」のものであることを物語っています。そのほか京橋本八丁堀（写真6）や横浜本町三丁目の写真にも唐破風屋根の山車が見受けられます。



写真6 山王御祭礼 32 番京橋本八丁堀  
「神宮皇后の山車」（大正博覧会）



写真5 日本橋通三丁目（現渋川市裏宿）の山車  
（明治時代山王祭礼）



写真4 神田御祭礼 14 番橋本町二丁目（現千代田区東神田町会）「乙姫の山車」 写真提供：神田明神



写真 7 志義町（現川越市仲町）「羅陵王の山車」

写真提供：川越市

これらの山車にはいくつかの共通した特徴があります。唐破風屋根を支える「垂木」が二本一組であること、屋根の軒下に「懸魚」と呼ばれる金色の彫刻が飾られていること（「蘭陵王の山車」だけは例外ですが）、唐破風が流麗な曲線を描いていること、などです。宮師の作風が一致しているのです。おそらく文久二年に「だし鉄」によって唐破風屋根の山車が考案され、その端正で堂々としたたたずまいが多くの人を

魅了し、明治に入ってから「だし鉄」に注文が殺到したのではないかと考えられます。逆に言えば、これらの特徴を備えた山車は「だし鉄」製の可能性が高いということです。

### 川越の山車

わが町川越にも、文久二年のまつりに曳き出された唐破風屋根の山車があります。志義町（しぎまち。現仲町）の「羅陵王の山車」（写真7）です。

この山車も、垂木、懸魚、流麗な曲線といった「だし鉄」の特徴をすべて備えています。加えて言うところ「脇障子」と呼ばれる囃子台後方の仕切りも、加須の「蘭陵王の山車」とそっくりです。これだけ条件がそろっているのですから、「羅陵王の山車」も「だし鉄」の製作であると言って間違いのないと思います。

実は川越にとつて、この山車の出現は衝撃的な出来事でした。というのも、当時の川越藩はお金がないことで有名で、二年に一度のまつりの開催すらままならず（ほぼ二十年に一度の頻度でした）、変化の速い江戸の流行についていけなかったからです。それが何の前触れもなく江戸の最先端に追いついてしまったのですから、周りの町は色めき立ちました。志義町の隣の南町は、同じ文久二年に三層せり出しの山車を新調していたのですが、十年もたない明治三年に屋根を唐破風に作り変えました。明治二十一年には、それまで山車を所有していなかった六軒町までもが、唐破風屋根の山車を持つようになりました。


明治の後半になると、東京では路面電車の普及で電線が網の目のよう

に張り巡らされ、山車が曳き回せなくなりまりました。そのため川越のまつりは独自の道を歩むようになりました。特に山車の進化は目覚ましく、唐破風屋根はもちろんですが、車体は大型化し、彫刻や彫金細工で美しく飾られ、果ては台座（せいご台）が水平に回るように改造されました。天下祭の精神を受け継ぎながらも、江戸時代のように上から規制されることなく、自由で華麗なまつりができるようになったからです。その影響は川越周辺の町にまで広がり、川越を中心とした「まつり文化圏」の様相を呈するようになりました。そのきっかけとなったのが「だし鉄」の山車であったことは言うまでもありません。

川越のまつりは、天下祭を脈々と引き継ぎながらも、独自の進化を続けてきました。まつりの伝統を十分意識しつつ、さらに発展させていくことが、川越に与えられた使命のよう気がします。そのことにおごることなく、誰もが楽しめるまつりにしていくことを周りから期待されているのではないのでしょうか。川越にとって、それはこの上なく光栄なことだと思います。

# 奉 祝 山 王 祭

順不同敬称略

	山王むらさき会 会長 藤田 誠	(株)アルファビデオ 代表取締役 青山 朋孝	(株)食文化総研 レストラン黒澤グループ	日枝神社四葉会	(株)ザ・キャピトルホテル 東急 総支配人 末吉 孝弘	山の茶屋 遠藤 恒夫	山王熱供給(株) 代表取締役 津曲 荒太 2口	永田町・霞ヶ関 平 河 町	(株)ぬ利彦 代表取締役 中澤 彦七 3口		
	池田薬局 池田 新一	三番町 田中 康博	(株)伊勢半本店 代表取締役 澤田 晴子	(有)ナリタ美容室 代表取締役 成田 弘子	弁護士法人一番町総合法律事務所 代表社員 神崎 浩昭	(株)シヨー・コーポレーション 代表取締役 堀切 健司	(株)ジャパングレーライン 代表取締役 眞下慶一郎	麴町ビルディング(株) 勝山 勝	(株)ニュー・オータニ 代表取締役 大谷 和彦	(株)植むらフーズ 永田町 天竹 荻原 秀夫	
(株)キョウエイアドバイザーナショナル 代表取締役 廣瀬 勝巳	TANKAホールディングス(株) 代表取締役社長 執行役員 田中 浩一朗	(株)東京會館 取締役社長 渡辺 訓章	(株)泉吉(株) 代表取締役 岸本 昌子	(株)帝国ホテル 取締役社長 定保 英弥	東宝(株) 名誉会長 松岡 功	東京技工(株) 代表取締役 林 光男 2口	大手町・丸の内 内幸町・有楽町	(株)千修 代表取締役 下谷 友康	(株)朝日写真ニュース社 代表取締役 阪田 裕一	(資)清水隆商店 代表社員 清水 昭治 表千家 不審菴 家元 千 宗左	
北見不動産(有) 会長 北見 芳夫 代表取締役 北見 千穂	八丁堀 茅場町・兜町	小宮山印刷(株) 代表取締役 小宮山 貴史	金子架設工業(株) 代表取締役 青木 茂	中西瀝青ホールディングス(株) 代表取締役 森口 友美子	木村實業(株) 代表取締役 木村平 右衛門	川崎定徳(株) 代表取締役 川崎 眞次郎	日本橋吉野鮎本店 吉野 正敏	東京建物(株) 代表取締役 社長執行役員 野村 均	(株)高島屋 代表取締役 専務 亀岡 恒方	(株)栄太樓總本舗 代表取締役 細田 眞	八重洲・日本橋 日本橋ゆかり 野永喜一郎
やす幸 石原 壽	(株)小林傳次郎中央地所部	(株)ギンザのサエグサ 代表取締役 三枝 亮	(株)木村商店 代表取締役 木村 暖子	(株)小松ストア 代表取締役 小坂 敬	新 銀 橋 座	清水建設(株) 取締役社長 井上 和幸	(株)トミタ 会長 富田 正一	(株)大澤ロイヤル 代表取締役 大澤 忠政	(株)プレナス 代表取締役 塩井 辰男	(資)北見商店 北見まさ彦 いらよし証券(株) 代表執行役 長 玉田 弘文	



# 奉 祝 山 王 祭

順 不 同 敬 称 略

マネックス証券(株) 会 長 松本 大 2口		(財) 答礼会 理 事 長 徳 永 将 2口		崇敬者(氏子外) 富士産業(株) 代表取締役 中村勝彦 (株)三越伊勢丹 執行役員 山下卓也 三越銀座店長		(株)銀座木村家 代表取締役 木村美貴子 銀座吉田(株) 代表取締役 吉田民雄		(株)新橋玉木屋 代表取締役 田巻恭子 銀座越後屋 永井甚右衛門		正金商事(株) 代表取締役 蛭原宗久 (株)新橋玉木屋 代表取締役 田巻恭子		(株)銀座ナイフ 代表取締役 柴田孝則 (株)泉屋東京店 代表取締役 泉由紀子			
(株)高田装束店 東京店 代表取締役 加藤充則		(株)井筒装束店 代表取締役 佐織鉄郎		(株)アーバンネットコーポレーション 代表取締役 服部信治 (株)槽谷 相談役 槽谷孝男		(株)ミロク情報サービス 代表取締役 是枝周樹 鈴木徽章工業(株) 取締役会長 鈴木健之		(株)フエム 代表取締役 藤田誠 京橋大根河岸会 会 長 鈴木敏行		(株)錦屋マリエマリエ 取締役社長 勝田久美子 きねや足袋(株) 代表取締役 中澤貴之		(株)ホツタ 取締役社長 堀田峰明 コトー商事(株) 代表取締役 野玉善一		(株)泉屋東京店 代表取締役 泉由紀子 (株)ホツタ 取締役社長 堀田峰明	
朝日総業(株) 代表取締役 池本なぎさ		(株)信英堂 代表取締役 桜井俊一 佐藤産業(株) 会 長 佐藤太美雄		有楽商事(株) 代表取締役 平沼顕司		廣田特許事務所 代 表 廣田雅紀 (株)丸井スズキ 代表取締役 鈴木貴博		(株)フォーシーズ 代表取締役 浅野秀則 安全自動車(株) 代表取締役 中谷宗平		(株)なだ方 代表取締役 卷木通浩 裏千家 今日庵 千 玄室 宗室		(株)兵左衛門 代表取締役 浦谷剛人 佐竹昭二		(株)大槻装束店 代表取締役 大槻奈津子	
(株)村松仙翁むらつ酒商類 月 桂 (株) 白鶴酒造(株)東京支社 菊 正 宗 酒 造 (株) キン シ 正 宗 (株) 白鷹(株)東京支店 ヒガシマル醤油(株) 辰馬本家酒造(株) 日本盛(株)東京支店 霧 島 酒 造 (株) 日本盛(株)東京支店 辰馬本家酒造(株) ヒガシマル醤油(株) 白鷹(株)東京支店 キン シ 正 宗 (株) 菊 正 宗 酒 造 (株) 白鶴酒造(株)東京支社 月 桂 (株)		(株)武蔵鶴酒造(株) (株)矢尾本店酒つくりの森 近藤酒造(株) 大信州酒造(株) 七笑酒造(株)		(株)鍋 店 (株) 福徳長酒類(株) 木戸泉酒造(株) (株)家久長本店 天鷹酒造(株) (株)小山本家酒造 武蔵鶴酒造(株) (株)矢尾本店酒つくりの森 近藤酒造(株) 大信州酒造(株) 七笑酒造(株)		(株)石川酒造(株) (株)金井酒造店 福徳長酒類(株) 鍋 店 (株) 木戸泉酒造(株) (株)家久長本店 天鷹酒造(株) (株)小山本家酒造 武蔵鶴酒造(株) (株)矢尾本店酒つくりの森 近藤酒造(株) 大信州酒造(株) 七笑酒造(株)		(株)江井ヶ嶋酒造(株) 桃川(株)東京支店 田村酒造場 石川酒造(株) (株)金井酒造店 福徳長酒類(株) 鍋 店 (株) 木戸泉酒造(株) (株)家久長本店 天鷹酒造(株) (株)小山本家酒造 武蔵鶴酒造(株) (株)矢尾本店酒つくりの森 近藤酒造(株) 大信州酒造(株) 七笑酒造(株)		(株)新 政 酒 造 (株) 醉 仙 酒 造 (株) 秋 田 銘 釀 (株) 沢 の 鶴 (株)東京支店 盛 田 (株) 賀 茂 鶴 酒 造 (株) ヤマサ醤油(株) キンビル(株)東京支店 濱 田 酒 造 (株) 小西酒造(株)東京支社 宝 酒 造 (株) 雲海酒造(株)東京支店 霧 島 酒 造 (株) 日本盛(株)東京支店 辰馬本家酒造(株) ヒガシマル醤油(株) 白鷹(株)東京支店 キン シ 正 宗 (株) 菊 正 宗 酒 造 (株) 白鶴酒造(株)東京支社 月 桂 (株)		(株)薩摩酒造(株) 吉乃川(株)東京支店 太田酒造(株) 黄 桜 (株) (株)ちくま食品 (株)山本本家 江井ヶ嶋酒造(株) 桃川(株)東京支店 田村酒造場 石川酒造(株) (株)金井酒造店 福徳長酒類(株) 鍋 店 (株) 木戸泉酒造(株) (株)家久長本店 天鷹酒造(株) (株)小山本家酒造 武蔵鶴酒造(株) (株)矢尾本店酒つくりの森 近藤酒造(株) 大信州酒造(株) 七笑酒造(株)		(株)山梨銘釀(株) 谷 櫻 酒 造 (株) (株)土井酒造場 (株)本田商店 都 錦 酒 造 (株) (株)醉心山根本店 (株)今田酒造本店 醉 鯨 酒 造 (株) 土 佐 鶴 酒 造 (株) 千代の園酒造(株) (株)榊田酒造店 柝 倉 酒 造 (株) (株)丸山酒造場 (株)北雪酒造 菊 水 酒 造 (株) 奥 の 松 酒 造 (株) (株)大和川酒造店 (株)和 田 酒 造 (株) (株)六 歌 仙	
酒は、これを神々に献り、その撒下をいただく事によって、うつつととした気持ちで晴れやかなる百葉の長です。 当日枝神社の御祭神大山咋神は、古来、酒を司らせ給う東都の酒神と厚く信仰せられるところであります。															
令和三年正月献酒醸造元芳名(順不同、敬称略) (株)木村屋總本店 木村光伯 (株)CMC 高橋悦郎															

# 奉納書初展

令和三年一月六日(水)の午後二時に奉納書初展感謝奉告祭を神職のみで執り行い、書初展奉納作品を一月十五日(金)迄境内に展示しました。

今年の宮司賞は大妻中学校鈴木ゆり子さんが、氏子崇敬会長賞は和洋九段女子中学校の鈴木愛美さんが其々受賞されました。尚、今年は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、山王奉書会は中止致しました。



第五十七回 山王奉書会  
表彰者芳名(順不同)

### 宮司賞

大妻中学校三年 鈴木ゆり子殿

### 氏子崇敬会長賞

和洋九段女子中学校三年 鈴木 愛美殿

### 秀作

番町小学校五年 小玉 凜音殿

お茶の水小学校四年 田近 千翔殿

富士見小学校五年 内山 諄香殿

昌平小学校六年 田中 彩葉殿

千代田小学校六年 林 大雅殿

月島第二小学校六年 中務 利祈殿

九段中等教育学校一年 五十嵐奈桜殿

九段中等教育学校二年 青葉 葦珠殿

麹町中学校二年 亀山 未来殿

山脇学園中学校一年 一色 優希殿

## 宮司賞をいただいて

大妻中学校三年 鈴木 ゆり子

この度は宮司賞に選んで頂きありがとうございます。昨年から続く新型コロナウイルス感染症の拡大により、十分に部活動の練習ができない中、このような賞を頂けて驚きと共に大変嬉しく思います。

私が今回この書初展に出展するにあたって何の字を書こうか悩んでいた時に、「春物自清美」という字を見て、とても綺麗な言葉だなと思い、これを書こうと決めました。「春物自清美」と

いう言葉には「春に於ける物は自然に清く美しい」という意味があるそうです。今、世の中ではコロナウイルスが流行し、暗い気持ちになりがちですが、この世の中にも春が来て早く明るい気持ちになれるようになってほしいです。

今回、直接日枝神社に伺って自分の作品や部活動の仲間達の作品を見ることができなかったのは残念ですが、昔からよく行っていた日枝神社の宮司賞を頂け



## 氏子崇敬会長賞をいただいて

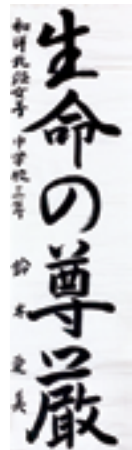
和洋九段女子中学校三年 鈴木 愛美

この度は、第五十七回日枝神社奉納書初展において、氏子崇敬会長賞に選んでいただきありがとうございます。小学一年生の時から書道を始め、色々な大会に出展してきましたが、ここまで賞をいただいたのは初めてで、とても驚いています。

今回、私が選んだ書は「生命の尊厳」です。限られた大きさの紙の中に「生命の尊厳」という五文字を収めるために、大きさや先生に指導された箇所を意識しながら書きました。

中学二年生の時に、山王奉書会に行き、賞を取った先輩の作品を見て、とても凄いと感じました。今回、その先輩と同じ賞を取ることが出来たので、書道を通じてきて本当に良かったと思います。

具体的には、「生」は画数が少ないので、バランスに気を付けました。また、「厳」の中の基本や間隔に留意して書きました。そして、書は一枚、一枚違い、同じ書はないという意識を持って、この書に臨んだので、良い緊張感の中で、一字、一字



丁寧に書くことを心掛けることが出来ました。その結果、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、部活動の時間が例年よりも少ない状況でしたが、自分が納得出来る「一枚」を仕上げることに出来ました。

今日まで書道が続けることが出来たのは、いつも熱心に指導してくださる先生方、応援してくれる友達や家族のおかげです。これから、自分の書を見てくださった方々に感動を与えられるように書に励みたいと思います。

# 宝物殿紹介



昭和五十四年六月に氏子各町の総意の下、国宝・重要文化財指定の刀剣を始めとした宝物を収蔵・展示する宝物殿が建立され、現在に至るまで多数の参拝者が訪れています。

江戸城内に鎮座し、徳川幕府の産土神とされた性格上、歴代の将軍から奉納された刀剣が主な宝物となっています。

現在保存されているのは三十一口で、その内、国宝一口・重要文化財十四口・重要美術品一口を数えます。他にも、山王祭ゆかりの山車人形や獅子頭、徳川家康公の朱印状等が展示されていますので、お参りの際には是非お立ち寄りください。

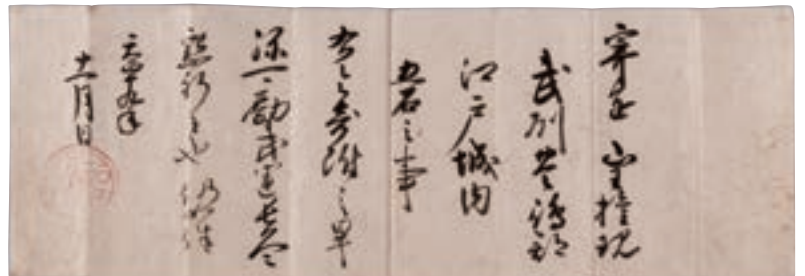
## 日枝神社宝物殿

### 開館時間

午前10時から午後4時迄  
 (火・金休館日・\*神社行事等により、臨時に休館日を設ける場合がございます。)  
 二ヶ月に一度展示刀剣の入替を行います。



徳川家光公朱印状



徳川家康公朱印状



獅子頭



国宝 太刀 銘 則宗 附糸巻太刀拵

# 撰社祭

六月十一日十二時

日本橋茅場町に鎮座する撰社日枝神社は、山王御旅所とも呼ばれ、二年に一度の神幸祭の際には、永田町の本社から氏子区域を巡幸して来た鳳輦と神輿が社殿前に奉安され神事が行われます。その歴史はさかのぼって四百年以上前の天正十八年（一五九〇）、徳川家

康公が江戸城に入城し、日枝大神を崇敬されて以来、御旅所のある「八丁堀北嶋（鎧島）祓所」まで神輿が船で神幸されたことにはじまります。

「撰社祭」は神幸祭が行われない所謂「陰の年」に斎行されます。かつて明治十八年三月十二日に近隣の坂本町からの出火により、御旅所は

類焼しました。しかし同

年六月十三日御旅所の仮

本殿を築いて遷座祭が行

われたことに因み、現在

も隔年で六月十三日前後

に、厳かな雰囲気の中で

執り行われる神事に、神

楽舞やお囃子が華を添え

ます。本年は新型コロナウイルス

ウイルス感染症拡大防止

の観点より、残念ながら

「撰社祭」に御参列を賜

ることは出来ませんが、

是非撰社日枝神社にお参

りいただき、江戸より伝

わる「御旅所」の空気を

味わい下さい。



## 疫病と広重画「両国花火」

武蔵大学教授 福原敏男

大川端（隅田川下流の右岸）両国の花火は、旧暦五月二十八日から八月二十八日までの、三カ月間にわたる川開きに打ち上げられた。

「一両が花火間もなき光かな」（宝井其角）と詠まれたように、手の込んだ花火は高価なものであり、玉屋と鍵屋を支えるスポンサーの多くは、近くの料亭や屋形船を貸し切るような大店おわたなの旦那衆であった。

花火の錦絵の多くは、両国の楽しい夜を讃えるような作品であり、実際には行灯などに照らされた薄暗い空間であっても、画面全体は明るく表現されている。例えば、図1橋本貞秀画「東都両国ばし夏景色」には両国橋の大混雑が描かれ、「千人が手を欄干や橋すずみ」（其角）の句を思わせる。また川面に櫛比する納涼の船遊山も圧倒的である。

一方、図2歌川（安藤）広重による四季名所絵の連作「名所江戸百

景」のなかでも著名な「両国花火」は、どこかもの静かである（三六・〇×二四・四cm、以下、本作と表す）。

構図は大川西岸の柳橋から南東方向を望む風景である。花火に照らし出された川面には屋根船、猪牙船、煮売船の灯りがわずかに描かれ、一艘のみの屋形船の灯りも寂しげに浮かぶ。ほのかに現れる両国橋上や、東岸川端の町並みに灯りは見えず、例年には通人たちが集うはずの料亭や出茶屋は店仕舞いの様子である。夜空に大きく弾ける花火玉の華やかさに対して、人の世界は寂寞としたコントラストをなしている。

「名所江戸百景」は全体的に画面が静謐であるが、本作は特に独自の印象を湛えている。華やかな景色を描くはずの錦絵において、弧を描き落ちていく花火は秋の気配を漂わせるとの解釈もある（江戸東京博物館「隅田川 江戸が愛した風景」展図録、

二〇一〇年）。

原信田実氏はこの連作を、安政二年大地震からの復興を告げる「報道画」であるとする一方、本作に地震以来続く「不景気風」を指摘する（『謎解き広重「江戸百」集英社新書、二〇〇七）。

本作には、絵双紙改掛（町名主）により安政五年（一八五八）八月に許可された改印があり、これまで同年の川開き初日の景とされてきた。しかし安政五年初日に関する記録には、「両国橋下流の安宅の御船蔵まで見物の船であふれる盛況ぶりは、天保の頃に劣らない」（広瀬六左衛門『雑記抄』、また「夜店が始まり、賑わっている」（『斎藤月岑日



図1 橋本貞秀画「東都両国ばし夏景色」

© 国立国会図書館



図2 歌川(安藤)広重「名所江戸百景」[両国花火] © 国立国会図書館

記」とも記され、本作の印象とは大きく異なる。

「安政五年」は江戸が初めてコレラに襲われた年でもあった。同年、長崎港に入った米国船員よりコレラが蔓延し始めたのは五月のこと

した。西国よりコレラに関する情報が届けられるようになったものの、六月半ばの江戸においては、まだ山王祭が催されるほどの平常であった。

しかし七月に入ると江戸でも感染は拡大し、六日には將軍徳川家

定が三十五歳の若さで死去するという出来事があった(死因は持病の脚気とも、コレラともされる)。

この後、市中は忌服きぶくによる鳴物停止ちやうじとなり、特に七月後半から九月にかけての惨状は目を覆うほどであったようだ(『武江年表』など)。

本作は「名所江戸百景」の「秋の部」へ分類されており、上記より考えると、七月上旬の花火を描いた蓋然性が高かろう。(分類は広重没後)

遡ること三十六年前、文政五年に初めて流行した前回のコレラ禍は西国を中心としたものであったが、その当時満二十五歳だった広重には、各地の惨状が深く記憶に留められたに違いない。

連作の完成も間近だった晩年の広重にとって、花火はその一枚として欠かせない画題であった。

輝く花火の下に人気は多くなく、寂寥感すら漂わせる。本作が世に出る翌八月の時点では、コレラが拡大することを予想した上で、江戸がコレラに呑み込まれる不気味な兆しというメッセージを発している(同年九月六日に没した広重の死因にもコレラとの説もある)。

商売に影響しようとも店々を休業し、疫病の終息を願いつつ、楽しみの風物詩をあきらめざるを得なかった江戸の人びとの心持ちを、今現在の私たちなら理解できそうである。

# 山王祭事曆

## 箸感謝祭

八月四日(水)十時半

## 敬老祭

九月二十日(月)十四時

## 山王祖霊祭

九月二十三日(木)十一時

## 日枝神社新嘗祭

十一月二十三日(火)十一時

感染症の状況により、中止若しくは神職のみで行う可能性がございます。また、緑陰朝詣りとラジオ体操の集いは中止致します。何卒ご了承ください。



# 山王台通信

## 神社本庁辞令

主典	室山 倫広
主典	福井 仁裕
主典	永井 承吾

日枝神社権禰宜に任ずる  
令和三年二月一日付

権禰宜	福井 仁裕
-----	-------

埼玉県 高城神社権禰宜に転任  
令和三年四月一日付

権禰宜	永井 承吾
-----	-------

北海道 樽前山神社権禰宜に転任  
令和三年四月一日付

## 新入職員紹介

出仕 中村 壮太

愛知県出身  
國學院大學神道学専攻科修了

出仕 金鑽 和樹

埼玉県出身  
國學院大學神道文化学部  
神道文化学科卒

巫女 眞壁 郁恵

東京都出身  
國學院大學神道学専攻科修了

嘱託 杉本 智行

# 御神米づくり 田植祭

令和三年四月二十九日(土)に御神米づくり田植祭を執り行いました。本年も新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、神職のみで祭典・田植えを行いました。



〈通巻百三十八号〉

発行 令和三年六月一日

編集 日枝神社社務所

東京都千代田区永田町二丁目十番五号

〈郵便番号 一〇〇〇〇一四〉

TEL 〇三―三五八―一四七(代表)

FAX 〇三―三五八―一〇七七

<http://www.hiejinja.net/>

日枝神社の最新情報をチェック!

# 日枝神社 山王祭公式アプリ

無料

iOS 端末 android 端末 対応

ホームページ・Twitter・Facebookでも情報を公開しています。QRコードもしくはURLからご覧ください。



山王祭  
公式ホームページ  
<http://www.tenkamatsuri.jp/>



日枝神社  
公式 Instagram  
<https://www.instagram.com/hiejinja>



日枝神社  
公式 Facebook ページ  
[www.facebook.com/hiejinja/](http://www.facebook.com/hiejinja/)



婚礼お下見  
随時受付中

9:00 ~ 16:00

詳しくはお問合わせ下さい。



日枝神社  
結婚式場

日枝 あかさか

東京都千代田区永田町2丁目10番5号  
TEL.03-3502-2205 FAX.03-3502-8948  
<http://www.hieakasaka.net/>